

令和5年度北海道立教育研究所運営懇談会

1 開催日時

令和6年(2024年)2月21日(水)13時30分～15時

2 会場

遠隔会議システム (Zoom) により、道研内の第3実習室と各構成員をオンラインで接続

3 構成員

高橋雅明 (赤平市教育委員会教育長)、佐藤敏治 (増毛町教育委員会教育長)、丸岡哲也 (古平町立古平小学校長)、北村剛 (千歳市立駒里小中学校長)、藤井一志 (北海道札幌東高等学校長)、倉科辰男 (北海道札幌伏見支援学校長)、芳賀均 (北海道教育大学旭川校准教授) ※欠席: 舛田那由他 (北海道PTA連合会参与)

4 道研出席者

所長以下の管理職員及び関係職員

5 次第

(1) 所長挨拶

(2) 議題「令和5年度事業報告及び令和6年度事業計画について」

ア 説明

イ 説明内容に係る質疑応答

ウ 意見交流 (道研に期待すること等)

(3) 閉会

6 資料

(1) 運営懇談会開催要項

(2) 運営懇談会資料 (1～3)

(3) R5 道研要覧

議 事 録

議題「令和5年度事業報告及び令和6年度事業計画について」

【奥寺副所長】

道研に期待することなどについて、順次御意見を伺って参りたい。初めに調査研究事業の関係について、ご意見やご要望、あるいは感想をいただきたい。

【赤平市・高橋教育長】

令和6年度のプロジェクト研究おテーマで、①の中学校の技術と家庭におけるプログラミング研修教材の開発について、いつ頃できるのか、予定等があれば伺いたい。

【箕浦学力向上調査部長】

本庁の義務教育課と連携して、10月ごろを目処に、学校で少しでも役立つ教材なり研修に役立てる動画教材などの作成を検討し、今計画を立てているところ。作成した教材等を実際に用いていただいた後のご意見などにより改善を図りたいと考えている。

【教育大旭川校・芳賀准教授】

資料1の9ページの調査研究の③と④についての話。よくSTEAMを教科横断的な、という言い方をするが、本当は統合的に捉える、つまり教科の境目を意識しないということが重要である。最近STEAM教育自体、何でもありのような捉え方になってきているが、それでは現場の先生方も混乱してしまう。STEAMにおいては、具体（個別的、実際）、抽象（一般化、理論）、拡散思考（多様な考えをたくさん出す）、収束思考（考えを一つにしぼる）、この4つの要素を同時に実現することが大事となる。教科の学習というのはそれぞれ棲み分けをしており、芸術などは多様なアイデアを出す（拡散）が、理科、算数だと答えを一つに絞らないといけない（収束）。教科で勉強するとそのような偏りが必ず生まれるが、STEAMの場合ではこの両方の面からたくさんアイデアを出しつつ、一つに絞っていくことも必要となる。

中学校技術科の免許の先生が少ないということで、理科の先生が兼任している場合も多いと思うが、理科は抽象、理論であり、技術は具体的、実地的なもので、現場で受け持つ先生は全く異なったことをしなくてはならない状況になっている。しかし、STEAMの場合はこれを全部まとめてしなければならない。このような授業を作るにはどうしたらいいのか、枠組みが示されると、先生方も具体的な活動がしやすくなると思う。ただ形だけを追求してやっつけていこうとすると、文部科学省の書き方も、現場の先生方には分かりにくい可能性のある言い回しになっており、現場の先生も大変なことになるので、このように見たら分かりやすい、というような提案ができるとういと思う。

【伊藤学力向上調査部研究主幹】

文科省の中教審の資料の方にも、STEAM 教育についての指針が示されているので、十分配慮して進めなければならないと考えている。もともとは前身の理科教育センターの研究から始まったところはあるが、今年度、道研として一つにまとまった中で、統合効果を発揮する、まさにそれを象徴できるような研究の一つではないかと考えているので、他の教科の実践と往還をしながら、充実させる方法について研究を進めるとともに、大学、企業の協力も仰ぎながら、現場に効果のある研究を進めてきたい。

【札幌東高校・藤井校長】

来年度のプロジェクト研究について、学校の多くの課題をいろいろ想定され、絞り込んで5つのテーマを設定したことと思う。ぜひこうした研究内容が各学校の先生方に伝わって、授業の中で活用できればと思っている。現場では、1時間1時間の授業で、子どもたちと勝負をし、探究的な学習を進めるなどの積み上げを行っているので、ぜひ、この研究のねらい、先の見通し、進捗状況など、ワンペーパーでもいいので、先生方に伝わるような仕掛けを作っていただければと思う。

道研のホームページもリニューアルされ、大変見やすいと思うが、こちらから意図をもって見に行かなければ情報が取れないような状況である。先生方は研修の時間を潤沢に取れるわけではないので、例えば、希望する教員には個人のスマホや校務用のパソコンにLINE、X、インスタグラムといったSNSを活用して道研から発信されてくるようにしていただければと思う。自分から情報を取りに行くことも大事だが、よい情報がどんどん配信されてきて、教職員の目に触れることで先生方のモチベーションが高まればと思っている。なかなか大変なこととは承知しているが、ぜひそのようにして道研の研究が広く多くの人に伝わっていけばよいと思っている。

【箕浦学力向上調査部長】

ただ今のお話の中で、発信という点については、道研では大きな課題だと感じている。道研のホームページを知らない、そもそも道研自体を知らない先生方も多いので、道研の存在を知ってもらうこと、また研修講座の内容など色々な形でPRしていきたいと考えている。また、道教委においても様々な先生方の研修会や指導主事の集まりなどもあるので、そこでも広めていきたい。

【札幌伏見支援学校・倉科校長】

特別支援学校の視点から、プロジェクト研究のことについて2点お話をさせていただきたい。1点目は、へき地教育研究の取組について、特別支援学校の視点でへき地教育のことを考えるときに、すごく役立つということがある。特別支援学校の場合、一つの集団の中に色々な習熟度の子どもたちがいて、子どもたちを一斉に指導するときに、個別指導とか個別化という考え方もあるが、へき地教育のノウハウというのはすごく役立つと感じている。

2点目は、校内研修の企画運営の研究について、当校のことで恐縮だが、先生方の研修状況をまとめてみたところ、校内で研修している教員が多く、研修履歴に書かれている教員が多かった。ビデオやオンラインなどの方法で生徒指導、教材研究などの研修をしてい

る教員もいるが、実際的な授業に繋がる、あるいは空いた時間を見つけて研修をするというときには、やはり校内での研修を充実することが重要ではないかと思う。そうした点から校内研修の企画運営に関する研究には大変期待をしている。

【西島人材育成部研究主幹】

おっしゃるように、教師の学びというのは、第一義的にはやはり校内で行われるもの。ほとんど学校で生活しているので、そこでの学びがやはり重要となる。校内研修を充実させるため、例えば、1人1実践をする、ミニ研修を日常的に計画するなど、色々な方法も加味しながら、校内研修を活性化し、目指すところは教職員の集団づくりに役立つような内容を提示できる研究としたいと考えている。

【札幌伏見支援学校・倉科校長】

職員がコミュニケーションを取りながら行う研修が充実すると、初任者段階の先生方の資質の向上や、教員の離職の防止にも繋がるのではと思います、説明を聞かせていただいて、大変期待も高まった。

【奥寺副所長】

ここまで調査研究事業の関係についてご意見いただいたが、次に研修事業について、ご意見ご感想等をいただきたい。

【増毛町・佐藤教育長】

教育長の立場から発言する。年間、様々な研修が行われており、学校の方には積極的に参加して、学んだことを還元して、校内全体でスキルアップを図ってほしいと願っているが、現場からよく聞こえてくる声は、研修に参加する時間的な余裕がない、他の先生に代わりの指導をお願いするというような迷惑はかけたくない、また、小規模校が多数のため教員数が少なく調整が難しいなどの話をずっと聞いている。研修の効果を上げるためには、学校現場の多忙化の解消、教員の増員など、職場環境改善も同時に進めていかなければならないと思うので、本庁の教職員担当の方とも連携を図って進めていただければと常々思っている。もう1点、管理職の研修について、全道的にも同じではないかと思うが、教頭の昇任試験を受ける者が非常に少なくなっているため、管理職を目指すための研修も実施してほしい。

【飯塚人材育成部長】

管理職研修については、昨年度から研修講座を増やしているところ。併せて、管理職を目指すミドルリーダー層の先生方に対する研修を管理職研修に準じて行うという観点から、今年度は、教頭対象の研修にミドルリーダー層の先生も参加できるようにした。次年度も管理職研修にミドルリーダー層の先生も参加できることとし、意識を高めていくような工夫をしていきたい。

【奥寺副所長】

教員の多忙化・増員の関係については、我々も色々な機会の本庁と共有をしてまいりた

い。

【千歳市立駒里小中学校・北村校長】

研修に関して2点、感想をお話させていただきたい。1点目は、現在、教職員との面談の中で、研修の振り返りを行っているが、教科指導、ICT、生徒指導等、研修を希望する教職員が非常に多い。今後も魅力ある研修をお願いするとともに、特に小学校では、なかなか研修を受講することが、時間的に難しいということもあるので、オンデマンド型、若しくは、遠隔型の研修を選択できる研修が非常にありがたい。2点目は、私は、北海道へき地複式教育連盟の仕事もさせていただいており、その関係からも、遠隔型で、各学校と繋がりを持って、へき地小規模校での学びをどんどん進めていけるような研修が非常にありがたいと思っているので、小学校の現場の状況を踏まえて、そうした研修をより発展させていきたい。

【飯塚人材育成部長】

昨年から、先生方が参加しやすいように、まずオンデマンドで基本的な知識の部分について、自由に見ていただける時間に研修できるように進めている。また、遠隔型研修については、なるべく授業を空けなくても先生方が参加できるように、できるだけ午後の時間帯に講座を設定し、凝縮した時間で先生方との協議・演習を中心にとすることで取り組んでいる。へき地複式の研修では連携させていただきながら、今後とも一緒によろしくお願ひしたい。

【古平町立古平小学校・丸岡校長】

研修のスタイルについて。私もかつて教頭で4日間の集合研修を、また、3年ほど前には、資料1の28ページにあるような、3回の研修講座の間に、実践を交えるということで、その実践を持ち寄った交流ということができて、非常に充実しているスタイルだなと思ったところ。私は、道研の研修講座は覚悟を決めていくものであるという意識を持っている。それは道内における最先端の研究、また、現場に役立つ研修であると捉えているからであり、校長としても、職員を派遣する際には、時間がかかってもいいからしっかり受講し勉強してきてほしいと思っている。資料3の、管理職研修の1と2などが、そのような日程になっており、大変よいと思っている。授業改善が学校では今求められているので、一般教員に対しても受講奨励をしていきたいと思っているが、遠隔の効果が非常に大きいと思う反面、集合ならではの良さ、教員、特に若手の横の繋がりというものが培われるという側面もあるので、これは道研だけではなく、各学校、各町村、各管内での集まりでもできるが、資料を見ると、教科指導等については集合がなくなってきているので、地域研修サポート事業などで、地区ごと、少なくとも管内レベルでの何か支援等があり、ある年齢層が集まるような研修が企画されていくことを期待している。

【飯塚人材育成部長】

道研の研修に覚悟を持って参加いただくというお話もあったが、職場の実践に活かすという意味で、このような職場実践を挟む研修スタイルで効果を上げていただこうと考えているところ。講師による講義は、オンデマンドとしても配信するので、そこだけ知識の部

分を得たいという先生にもご紹介いただけるものと思っている。集合については、先ほど説明した地域研修サポート事業ということで、各市町村、管内で集まっていただき、サポートをしていきたいと考えている。資料3で言うと、28番の保護者との連携のあり方の研修については、若手の先生を中心に、コミュニケーションに関する資質能力をロールプレイを通して身に付けるという内容であることから集合で実施し、今年度、高い評価をいただいた。先生が、参加する研修講座を実施方法によって使い分けていただければと考えている。

【札幌東高校・藤井校長】

遠隔、オンデマンド、対面など、それぞれの良さを組み合わせて工夫し、こうした研修をされるということは大変素晴らしいと思っている。一方で、本来はじっくりと時間をかけて研修に取り組み、深めて、そして自分で気付いてそれをまた実践に活かす、ということができればいいが、実際はなかなかその時間が取れない。何年も前だが、京都の教育センターを視察した際に見せていただいたのが、「板書の仕方」の講義であった。若い先生方が参加をしていて、色チョークの使い方などを30分で完結する時間設定で講義を実施していた。次の日は、学習指導案の作り方を30分のコマで行っていたが、本当に必要最小限の時間で、教員のニーズに合わせた研修を勤務時間終了後、帰宅する際に立ち寄ってできるようにしており、大変よいと思った。じっくり時間をかけて深めるのも研修だし、必要なことを短い時間で学んで、そして次の実践に活かすということも大事であると感じた。例えば15分の動画のような短いものを、LINEやX、インスタグラムなどで希望する人にどんどん配信してもらえると、研修のコンセプトに書かれていた、インプットした知識で、そこで気付いて、主体的な学びに繋がっていくというようなことも実現できるのではないか。時間はかかると思うが、働き方改革が求められている中での効率的な研修の在り方の、一つの方法になるのではないかと考えている。

【箕浦学力向上調査部長】

教科指導の点で言えば、今の15分、30分のアイデア等について、こちらでも何かできるか考えてみたい。教科の研修講座の中には、先生方と、受講後もずっと時間をかけて個別にZoomで連絡を取りながらフォローアップをしている講座もある。特に小・中学校の教員を対象とした研修講座は、こうした方式で行っており、高校の教員を対象とした研修講座では、受講した先生に協力してもらって、先ほどのプロジェクト研究に繋げている例もある。道研の通常の研修講座でも持続的に行っているものがあるというのをご存知いただいた上で、ぜひ教育委員会や各校から受講を勧めていただきたい。

【教育大旭川校・芳賀准教授】

研修と教育の振興、これらは関連していると思っている。個別最適な学びと協働的な学びとは、子どもの立場からの学習という意味で対立するものではなく、全く同じ土台にあるものである。一人でも勉強できるし、友達とも勉強できる。これを先生に当てはめると、個々のニーズに基づいて、あるいは同僚と助け合って学びを進めて行くという考え方になると思うが、そういう意識の持ち方ができるよう、自分たちの発案が推奨される、校長から褒められる、道研で取り上げられるなどのインセンティブ、ポイントになるようなもの

があるとよいのではないか。

研修のオンデマンド、遠隔、道研による教員派遣など素晴らしい取組だが、それを発展させて、教育の振興についても同じ発想でできるのではないかと思う。サイエンスカーやネイパルで行う親と子の理科教室についても、実施会場から各市町村や、博物館、郷土資料館、図書館など他の会場に実況中継される、質問などを受け付けてもらえるとか、そのような仕組みができると、さらに興味・関心の喚起に繋がっていくのではないか。教職員の研修も同様で、実施するのは大変だと思うが、Zoomなども発達した時代なので、一つのことをやってたくさんの人が得られるような方法をしていただけるとありがたい。

へき地小規模校の研究、実践教育の振興も、その場にいるからこそできるというようなものが大事で、道内の学校で集合研修のようなことを頻繁に行うのもとても効果的だと思う。また、沖縄など他県の学校と繋いで、例えば、ただ廊下をお互い繋いでおくだけでも、何か起きると思う。そういう、何か起きるのではないか、というような、柔らかい形の発想から、何かができる余地を持てるといいのではないか。そのプラットフォームとして、何か道研で提供できるものがあるのではないかと考えている。

【市村教育課題研究部研究主幹】

サイエンスカーの取組については、大学生が道研に来たときに動画で紹介するなどしており、ほかにも紹介する機会があれば、今後も検討していきたい。へき地小規模校の遠隔での繋がり関係では、遠隔合同授業や遠隔交流については結構道内でニーズがあり、実際に行っている学校も多い。道外の学校との交流や、同じ中学校区内で休み時間に交流をして、同じ中学校に将来的には進学するといった事例もある。ただ、進んでいない学校もあり、そうした学校については、遠隔合同授業や遠隔交流のほかに、先生同士での日常的な授業の繋がりなども大事であることが研究の中でも分かってきているので、そうしたことを今後進めていきたい。

【教育大旭川校・芳賀准教授】

きちっと決めて取り組んでいかないと成果というのはなかなか出ないのははっきりしており、大事なことだが、一方で、ただやってみたら何か起きるかもしれない、というような、そういうところから問題というのは見いだせることがあると思う。そういうところにむしろヒントがあるかもしれないので、そういう草の根みたいなことも大事にできたらいいと思っている。もう一つ、学生の存在が大きいと思っており、こうしたことに関心の高い学生はたくさんいると思う。サイエンスカーやネイパルでの事業など、色々なことに関わらせて、関わった学生は採用試験で何かいいことがあるとか、そういうことも視野に入れていけたらいいのではないか。学生のうちの方が、教育に対する夢などたくさん持っている。実習でいきなりハードなところにぶつかってしまう前に、道研のこうした事業を経験してもらい、そういう機会にできたらいいのではないかと考えている。